

1 はじめに

教室創立十周年

中熊秀喜

医療環境は厳しさを増している。新臨床研修制度の導入以来、潜在していた医師不足が深刻な社会問題化している。安い医療費と便利な医療アクセスを享受してきた日本で、人口の高齢化もあり医療費が増加している。経済不況も重なり国家経済が逼迫している。社会的入院などが問題であるが医療費が元凶と誤解され、医師数制限政策がとられ医療を圧迫してきた。一方、情報化社会で世界中から最新医療情報を入手でき、かつ患者の権利意識の向上もあって、医療者への要求はエスカレートし、不幸な医事紛争も増えている。さすがに医の仁術やボランティア精神だけでは対応しきれず我慢の限界であろう。期限付で医学部学生定員数を増やしているが即効性はない。さてどうするか。低負担でそれに見合う医療で我慢するか、希望する医療にみあう負担増を受け入れるか、国民は選択を迫られていることを自覚し、政治家任せでなく自ら決断すべき時である。政権交代により将来の社会保障のあり方が俎上にある今が好機である。話しが逸れるが、個性光る大学を志す当キャンパスでも従来にも増して職員や県民目線で、かつ透明な運営を望みたい。

平成21年4月、当診療科は開設10周年を迎えた。大田喜一郎初代教授および当時の教室関係者のご苦勞に感謝したい。現教室員はさらなる発展をめざして志を新たにすべく、医局長主導のもとに9月26日、和歌山ビッグ愛にて、関係者の参加のもとに簡単な記念講演会を催した。本年報の写真記録をご参照下さい。他にも教室関連で変化があった。集学的治療部・緩和ケア部は10月1日付の腫瘍センター開設に伴い、センターに発展的に吸収された。月山緩和ケア部准教授は腫瘍センターの緩和ケア部門長へ、園木集学的治療部准教授と畑中一生助教は輸血・血液疾患治療部（血液内科）へ配置換えになった。将来的には、中央部門としての輸血部と、専門診療科としての血液内科の分離独立を提案していきたい。

医学教育には同僚とともに情熱を注いできた。嬉しいことに、村田先生、細井先生、蒸野先生の3人が入局し、新鮮な元気が漲っている。彼らの成長が楽しみである。診療面では、畑中先生の加入による移植医療の充実には目を見張るものがある。研究で英文原著も堅実に増えており、また将来の反響を予期させる興味ある成果も得られつつあり、大いに期待している。人の異動では、4年

以上にわたり教育、診療、研究に活躍してくれた松岡先生が母校の神戸大学へ准教授として12月1日付で戻った。彼の貢献に心から感謝し神戸での活躍を祈る。米国シアトル留学中の花岡先生、テキサスへ行かれた小島先生も元気の様子である。

常日頃、円滑なチーム医療の運営に協力してくれている5西病棟看護部、外来、輸血部の同僚に深謝します。最後に、平成15年以来、医局秘書を勤めてくれた大橋さんと東さんが、それぞれ9月末と12月末に、おめでた退職となった。本当にご苦労様でした。元気なベビー誕生を待っています。新しく秘書に花井宏実さんと濱口尚子さんを迎えました。皆さん、よろしくお祈りします。

2 教室現況

(1) 教室員

医局	教授	中熊秀喜
	准教授	園木孝志
	准教授	松岡 広 (～11月30日)
	講師	小島研介 (～1月31日)
	助教	畑中一生 (5月1日～)
	助教	花岡伸佳
	学内助教	栗本美和 (大学院生)
	学内助教	島貫栄弥 (大学院生)
	学内助教	細井裕樹 (4月1日～)
	学内助教	村田祥吾 (4月1日～)
自治医大卒研修生		蒸野寿紀 (4月1日～)
	研究生	なし
	大学院生	綿貫樹里
	出向	なし
	留学	花岡伸佳 (H20,4,1～) 米国ワシントン州シアトル市 Fred Hutchison Cancer Research Center
研修医		今村沙梨 (1月1日～2月28日)
		千葉堯弘 (1月1日～3月31日)
		蒸野寿紀 (2月1日～3月31日)
		村田祥吾 (2月1日～3月31日)
		江尻加名子 (3月1日～3月31日)
		形部裕昭 (4月1日～6月30日)
		合田杏祐 (4月1日～6月30日)
		田中由美 (4月1日～6月30日)
		田端宏堯 (4月1日～6月30日)
		津村亜矢子 (7月1日～8月31日)
		西岡美喜子 (7月1日～9月30日)
		吉田朱里 (8月1日～9月30日)
	留学生	なし
	秘書	大橋典子 (～9月30日)

		東 恵美 (～12月31日)
		花井宏実 (8月17日～)
		濱口尚子 (12月1日～)
輸血部	主査	松浪美佐子
	副主査	堀端容子
	副主査	中島志保
	医療技師	清水勇輝 (4月1日～)
	医療技師	山本華帆里 (4月1日～)
	医療技師	楠山摩希子 (～3月31日)

(2) 役割・責任体制 (血液内科医局 5月～12月)

園木：外来医長、副科長、教育主任 (4年生臨床医学講座「オーガナイザー」、学生臨床実習など)、保険請求担当医 (外来)、栄養管理委員、がん診療拠点病院担当医、電子カルテプロジェクトメンバー、身体障害者福祉専門分科会審査部会委員、和歌山県エイズ対策推進協議会委員、原爆被爆健康管理手当等認定医、更正医療担当

松岡：医局長 (医局行事、研究会、カルテ、治験)、研究主任、薬事委員、試薬管理責任者、卒後研修委員、輸血委員会、和歌山県献血推進協議会、人権・同和研修委員、オーダーリングシステム、予約メンテナンス管理

畑中：病棟医長 (入退院、当直表・日誌)、保険請求担当医 (入院、DPC、レセプト)、リスクマネージャー、がん化学療法プロトコール委員会、和歌山県骨髄移植対策協議会委員、移植調整医師、救急・集中治療連絡委員、感染予防対策委員

秘書：慶弔・渉外、薬の説明会

(3) 人事異動

講師	退職	小島健介 (1月31日)
助教	転入	畑中一生 (5月1日)

准教授	退職	松岡 広 (11月30日)
5 西病棟師長	転出	小谷典子 (3月31日)
5 西病棟師長	転入	塩路有理 (4月1日)
医療技師	退職	楠山摩希子 (3月31日)
医療技師	転入	清水勇輝 (4月1日)
医療技師	転入	山本華帆里 (4月1日)

臨床実習

平成 21 年 5 月～

輸血・血液疾患治療部（血液内科）								
集合場所：入院病棟 5 階西 集学カンファレンスルーム（内線 2539）								
時刻 曜日	8	9	10:30	12:30	13:30	15	16	17～
月		実習の 楽しみ方 (中熊教授)	症例学習				症例学習 【テーマ決定】(主治医)	17:00- 19:30 チャート カンファレンス
火	8:30-10:00 入院患者廻診 (中熊教授 /園木准教授)		症例学習		症例 学習	14:00-15:00 輸血部実習 (松浪主査)	症例学習	
水		外来・内科診察 (中熊教授)			症例学習		15:00-17:00 血球形態を学ぶ (畑中助教)	18:00- 抄読会
木	カンファ レンス (CC/ MGH)		症例学習		症例学習	15:00- 白血病治療 を知る (松岡准教授)	16:00- HIV 感染症を 把える (園木准教授)	
金			症例学習			症例学習	16:00- レポート発表会/ レポート提出 (園木→松岡) ※レポートは全員分と 教官用を準備	

自ら考え、自ら行動しましょう。

4 主な活動内容

(1) 学術講演会

1) 国内講演会

中熊秀喜：「グループケーススタディ、汎血球減少へのアプローチ」、第2回「研修医（初期、後期）のための血液学セミナー」、日本血液学会共催、7月11日、大津市

中熊秀喜：「発作性夜間血色素尿症（PNH）は雄弁～魅せる分子病態」、Tsukuba Hematologic Disease Seminar in September, 2009、9月10日、つくば市

園木孝志：「和歌山県に HIV 感染症の現状」、和歌山市薬剤師会講演、11月12日、和歌山市

中熊秀喜：「発作性夜間血色素尿症（PNH）～最新の基礎と臨床～」、第9回兵庫県造血器疾患学術講演会、11月13日、芦屋市

園木孝志：「リンパ系腫瘍と C-MYC 遺伝子転座」、腫瘍内科セミナー講演会、3月26日、川崎市

園木孝志「HIV 感染症の現状」市民講座
3月12日、和歌山市

2) 海外または国際講演会

該当なし

(2) 学会および研究会

1) 国内学会

畑中一生、鈴木律朗、熱田由子、福田隆浩「抗ヒトリンパ球ウサギ免疫グロブリンを前処置に用いた同種造血幹細胞移植に関する多施設共同後方視的研究」、第31回日本造血細胞移植学会総会、2月5日～6日、札幌市

朝倉舞子、池亀和博、吉原哲、谷口修一、森毅彦、衛藤徹也、高見昭良、吉田喬、福田隆浩、畑中一生、金森平和、湯尻俊昭、坂巻壽、鈴木律朗、小川啓恭
「造血幹細胞移植における foscarnet の使用実態全国調査」、第 31 回日本造血細胞移植学会総会、2 月 5 日～6 日、札幌市

細井裕樹、園木孝志、栗本美和、島貫栄弥、花岡伸佳、松岡広、直川匡春、中熊秀喜：「臍帯血移植を行った成人重症型再生不良性貧血の一例」、第 31 回日本造血細胞移植学会総会、2 月 5 日～6 日、札幌市

綿貫樹里、園木孝志、畠山金太、島貫栄弥、松岡広、中熊秀喜：「サイクリン D3 発現を伴う骨髄原発 B 細胞性リンパ腫」、第 49 回日本リンパ網内系学会総会、7 月 11 日、淡路市

西村純一、金倉 讓、大屋敷一馬、七島 勉、岡本眞一郎、安藤 潔、二宮治彦、川口辰哉、中尾真二、中熊秀喜、木下タロウ、Bedrosian C, Valentine ME、小澤敬也、小峰光博：「本邦 PNH 症例における補体阻害剤 eculizumab の安全性と有効性：AEGIS 第 2 相臨床試験」、補体シンポジウム、8 月 30 日、福島市

金倉 讓、大屋敷一馬、七島 勉、岡本眞一郎、安藤 潔、二宮治彦、川口辰哉、中尾真二、中熊秀喜、西村純一、木下タロウ、Bedrosian C, Valentine ME、小澤敬也、小峰光博：「Safety and efficacy of eculizumab in Japanese PNH patients: AEGIS phase II clinical study results. (口演) 第 71 回日本血液学会学術集会、10 月 24 日、京都市

松岡 広、栗本美和、花岡伸佳、采田志麻、島貫栄弥、細井裕樹、村田祥吾、直川匡晴、阪口臨、日野雅之、山根孝久、阪本親彦、太田健介、麦谷安津子、青山泰孝、園木孝志、中熊秀喜：「再発・難治性AMLに対するCAG療法およびG-CSF先行ゲムツズマブオゾガマイシン(GO)療法」、第71回日本血液学会学術集会、10月23日～25日、京都市

Saiko Kurosawa, Takuhiro Yamaguchi, Naoyuki Uchida, Shuichi Miyawaki, Kensuke Usuki, Masato Watanabe, Takuya Yamashita, Heiwa Kanamori, Junji Tomiyama, Yuichiro Nawa, Shingo Yano, Jin Takeuchi, Kazuaki Yakushiji, Fumiaki Sano, Nobuhiko Uoshima, Takahiro Yano, Yasuhito Nannya, Yoshiyuki Moriuchi, Jun Taguchi, Yasushi Okoshi, Masaki Mori, Momoko Mawatari, Haruko Tashiro, Hiroatsu Ago, Kazuo Hatanaka, Kazutaka Sunami, Hiroyuki Fujita, Yasuo Tohmiya, Yoichi Takaue and Takahiro Fukuda. 「Nation-wide survey of allogeneic HCT and chemotherapy in elderly patients with AML in CR1」. 第71回日本血液学会学術集会、10月23日～25日、京都市

栗本美和、松岡 広、平井慶充、吉増達也、加藤智也、今村沙梨、江尻加名子、合田杏祐、園木孝志、中熊秀喜：「縦隔原発胚細胞性腫瘍－血液悪性腫瘍症候群の1例」、第71回日本血液学会学術集会、10月23日～25日、京都市

島貫栄弥、園木孝志、細井裕樹、川上恵基、三浦偉久男、中熊秀喜：「両側14q32転座を示し免疫グロブリン重鎖(IGH)蛋白を発現するB細胞性腫瘍のIGH遺伝子再構成」、第71回日本血液学会学術集会、10月23日～25日、京都市

2) 海外または国際学会

Kanakura Y, Ohyashiki K, Shichishima T, Okamoto S, Ando K, Ninomiya H, Kawaguchi T, Nakao S, Nakakuma H, Nishimura J, Kinoshita T, Bedrosian C, Valentine ME, Ozawa K, Omine M. 「Chronic renal insufficiency in Japanese patients with PNH: Improvement with eculizumab treatment. 第51回米国血液学会 (51th ASH Annual Meeting)、12月5-8日、ニューオーリンズ市

Kojima K, Konopleva M, Tsao T, Andreeff M, Ishida H, Shiotsu Y, Jin L, Tabe Y, Nakakuma H. Selective FLT3 inhibitor FI-700 neutralizes Mcl-1 and enhances p53-mediated apoptosis in acute myeloid leukemia (AML) cells with activating mutations of FLT3 via Mcl-1/Noxa axis (2597, II-573). 第51回米国血液学会総会 (51th ASH Annual Meeting)、12月5-8日、New Orleans, USA

3) 研究会

中熊秀喜：第4回血液腫瘍免疫療法フォーラム、5月23日、名古屋市

園木孝志、細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、栗本美和、松岡広、畠山金太、中熊秀喜：「サイクリンD3(CCND3)発現を伴う骨髄原発びまん性大細胞型リンパ腫の7例」、第91回近畿血液学地方会、6月20日、奈良市

畑中一生、鈴木律朗、熱田由子、福田隆浩：「同種造血細胞移植における抗ヒトTリンパ球ウサギ免疫グロブリン(ATG-F:ゼットブリン)使用実態全国調査(経過報告)」造血幹細胞移植合同班会議、6月21日、名古屋市

園木孝志、島貫栄弥、千葉堯弘、中熊秀喜：「セファランチンを使用した難治性多発性骨髄腫の2例」、7月10日、アルカロイド研究会、大阪市

田中由美、島貫栄弥、細井裕樹、村田祥吾、栗本美和、畑中一生、松岡広、園木孝志、中熊秀喜：「急速な頸部腫瘍を主訴に受診した30代男性」、関西HIV臨床カンファレンス、大阪医療センター、9月12日、大阪市

中熊秀喜：「特発性造血障害の分子病態へ迫る～PNHから再生不良性貧血、そしてがん免疫へ」、和歌山秋期血液疾患治療研究会、9月26日、和歌山市、10周年記念

園木孝志、綿貫樹里、畠山金太、中熊秀喜：「症例解析に基づく新規リンパ腫概念「CyclinD3陽性リンパ腫」の提唱」、和歌山秋期血液疾患治療研究会、9月26日、和歌山市、10周年記念

松岡広、栗本美和、村田祥吾、細井裕樹、島貫栄弥、畑中一生、直川匡晴、阪口臨、日野雅之、山根孝久、阪本親彦、太田健介、麦谷安津子、青山泰孝、園木孝志、中熊秀喜：「当科主宰臨床試験研究「再発・難治性急性骨髄性白血病患者に対する抗がん剤およびG-CSF先行ゲムツズマブオゾガマイシン(GO)療法の効果解析」および付随基礎研究「GOの殺細胞効果を高める併用薬」の成果報告」和歌山秋期血液疾患治療研究会、9月26日、和歌山市、10周年記念

畑中一生、村田祥吾、細井裕樹、島貫栄弥、栗本美和、松岡 広、園木孝志、玉置俊治、中熊秀喜：「同種造血幹細胞移植と前処置の選択～りんくう総合医療センターと和歌山県立医科大学での治療成績～」和歌山秋期血液疾患治療研究会、9月26日、和歌山市、10周年記念

蒸野寿紀：「抗胸腺免疫グロブリン投与後に真菌性眼内炎を来たした再生不良性貧血の一例」和歌山秋期血液疾患治療研究会、9月26日、和歌山市、10周年記念

島貫栄弥、細井裕樹、栗本美和、畑中一生、松岡広、園木孝志、中熊秀喜：「化学療法後の骨髄抑制期間が遷延したエイズ関連バーキットリンパ腫の一例」、第4回和歌山血液フォーラム、10月31日、和歌山市

島貫栄弥：「イマチニブ不耐容例に対してニロチニブを使用した一例」、和歌山 Hematology Seminar、12月10日、和歌山市

細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、栗本美和、畑中一生、園木孝志、松岡広、尾崎敬、中熊秀喜：「寛解導入療法中に急性前骨髄球性白血病の肺浸潤による呼吸不全をきたした一剖検例」、第92回近畿血液学地方会、12月12日、京都市

(3) 学術論文

1) 和文原著

該当なし

2) 英文原著

Hanaoka N, Nakakuma H, Horikawa K, Nagakura S, Tsuzuki Y, Shimanuki M, Kojima K, Yonemura Y, Kawaguchi T: NKG2D-mediated immunity underlying paroxysmal nocturnal haemoglobinuria and related bone marrow failure syndromes. Br J Haematol 146(5):538-45, 2009

Kojima K, Shimanuki M, Shikami M, Andreeff M, Nakakuma H: Cyclin-dependent kinase 1 inhibitor R0-3306 enhances p53-mediated Bax activation and mitochondrial apoptosis in AML. *Cancer Sci* 100(6):1128-1136, 2009

Watanuki J, Hatakeyama K, Sonoki T, Tatetsu H, Yoshida K, Fujii S, Mizutani M, Abo T, Kurimoto M, Matsuoka H, Matsuno F, Nakakuma H: Bone marrow large B cell lymphoma bearing cyclin D3 expression: clinical, morphologic, immunophenotypic, and genotypic analyses of seven patients. *Int J Hematol* 90(2):217-25, 2009

Sonoki T, Li Y, Miyanishi S, Nakamine H, Hanaoka N, Matsuoka H, Mori I, Nakakuma H: Establishment of a novel CD20 negative mature B-cell line, WILL2, from a CD20 positive diffuse large B-cell lymphoma patient treated with rituximab. *Int J Hematol* 89(3):400-2, 2009

Uneda S, Murata S, Sonoki T, Matsuoka H, Nakakuma H: Successful treatment with liposomal doxorubicin for widespread Kaposi's sarcoma and human herpesvirus-8 related severe hemophagocytic syndrome in a patient with acquired immunodeficiency syndrome. *Int J Hematol* 89(2):195-200, 2009

3) 和文総説

中熊秀喜: エクリツマブによる発作性夜間血色素尿症の治療。血液フロンティア 19(9):80-84, 2009

中熊秀喜: 発作性夜間血色素尿症(PNH)の検査。検査と技術 37(6):513-518, 2009、医学書院

中熊秀喜: 発作性夜間血色素尿症 - 最近の話題。成人病と生活習慣病 39(7):808-812, 2009、東京医学社

中熊秀喜、花岡伸佳：発作性夜間血色素尿症。総合臨床 58(8):1736-1740, 2009

中熊秀喜：発作性夜間血色素尿症 (PNH) に対する治療指針-抗体療法は有効か？、2010-2011 EBM 血液疾患の治療、pp73-78、中外医学社

中熊秀喜：発作性夜間血色素尿症の新しい治療。血液・腫瘍科 59:271-278, 2009

中熊秀喜：Case 5. 発作性夜間血色素尿症 (PNH)。New 専門医をめざすケース・メソッド・アプローチ 血液疾患、印刷中、日本医事新報社。

中熊秀喜：発作性夜間血色素尿症。血液診療エキスパート、vol.2、貧血、中外医学社、印刷中

中熊秀喜：発作性夜間血色素尿症 (PNH)。MEDICO、40(12):13-16, 2009 協和企画

園木孝志「和歌山県における HIV 感染症の現状」和歌山県医師会雑誌第 38 巻、平成 21 年 3 月号

4) 英文総説

該当なし

(4) 著書 (単行本、シリーズもの含む)

中熊秀喜：血漿蛋白 (免疫グロブリン、補体)。内科学書、vol.6 血液・造血器疾患、改訂第 7 版、小澤敬也 (編集)、pp32-35, 中山書店、2009

中熊秀喜：発作性夜間ヘモグロビン尿症。今日の診断指針、2009、印刷中、医学書院

畑中一生：移植前処置における ATG の役割は。EBM 血液疾患の治療 2010-2011、pp535-41、中外医学社、2009

(5) その他の印刷物 (研究成果報告集、学会抄録集、寄稿文など)

なし

(6) 受賞等

なし

(7) 研究費、助成金

中熊秀喜：平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 特発性造血障害に関する調査研究班 溶血性貧血領域研究協力 (班長 小澤敬也 自治医大教授)

中熊秀喜：平成 21 年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 C (代表)、発作性夜間ヘモグロビン尿症の関連の特発性造血障害の分子病態の解明

(8) 支援研究会など

第 7 回和歌山造血細胞療法研究会、特別講演「造血幹細胞移植における感染対策」矢野邦夫、県西部浜松医療センター副院長、2 月 7 日、和歌山市

第 5 回 Practical Hematology、特別講演「骨髄異形成症候群の病態と治療」、三谷絹子、独協医大血液内科教授、2 月 28 日、大阪市

第 4 回和歌山血液フォーラム、特別講演「Two-side Coin 機能を持つ VWF と同切断酵素 ADAMTS13 の均衡破綻による微小循環障害」藤村吉博、奈良医大輸血部教授、10 月 31 日、和歌山市

白血病セミナー、特別講演 (ブリストルマイヤーズ主催)：「新規 BCR-ABL 阻害剤の治療戦略と副作用マネジメント」、岡田昌也 (兵庫医科大学血液内科講師)、5 月 8 日、和歌山市

血液セミナー、特別講演「細胞増殖を阻害する新規癌抑制遺伝子 TFL」、松井利充、(神戸大学大学院血液内科学分野准教授)、6 月 10 日、和歌山市

第416回和歌山市医師会内科部会例会 学術講演会（ノバルティス共催）：「半世紀を経てなお続く原爆後障害の現状」朝長万左男（日赤長崎原爆病院長）、6月27日、和歌山市

真菌症の治療を考える会（大日本住友主催）：「血液・移植患者の合併症対策～真菌感染症を中心に～」福田隆浩（国立癌センター医長）、10月2日

和歌山骨髓腫懇話会（ヤンセンファーマ株式会社主催）：「骨髓腫の骨病変の分子病態」安部正博（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部生体情報内科学病院教授）、11月27日、和歌山市

和歌山Hematology Seminar、特別講演「CML治療の現状」、宮崎泰司、（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設分子医療部門分子治療学研究分野（原研内科））、12月10日、和歌山市

（9）海外出張

中熊秀喜：I-PIG 国際ミーティング、12月4日、New Orleans, USA

中熊秀喜：第51回米国血液学会総会（ASH）、12月5-8日、New Orleans, USA

5 診療実績

(1) 入院 患者総 (のべ) 数 (一時退院後を含む)	264 名
退院 患者総 (のべ) 数 (一時退院を含む)	254 名
(2) 外来	
患者総 (のべ) 数	5,212 名
内新患者数	260 名

入院患者疾病別分類 (入院のみ, 重複あり, 疑い症例を含む)

1) 白血病	108
急性骨髄性 (単球性等)	
M0	4
M1	2
M2	48
M3	13
M4	5
M5	0
M6	1
M7	2
Mixes	0
MDS→AML	3
分類不可	6
急性リンパ性 (ALL)	14
慢性リンパ性 (CLL)	2
慢性骨髄性白血病 (CML)	8
2) 骨髄異形成症候群 (MDS)	7
3) リンパ性腫瘍	
非ホジキンリンパ腫	101
ホジキンリンパ腫	18
その他	
成人 T 細胞白血病/リンパ腫	4

4) 形質細胞腫瘍	
多発性骨髄腫	17
5) 血球減少症 (造血不全含む)	
再生不良性貧血	2
汎血球減少症	1
血小板減少症 (ITP 等)	2
血球貪食症候群	0
その他の貧血 (鉄欠乏性など)	0
6) 溶血疾患	
自己免疫性	0
他の溶血性貧血	2
7) 凝固・線溶異常	0
8) 骨髄増殖性疾患	2
9) 感染症	
HIV 感染症 (エイズなど)	10
10) その他	
造血幹細胞移植ドナー入院	12
全身性エリテマトーデス	0
アミロイドシス	2
右精巣腫瘍術後再発	1
(4) 死亡	12
(5) 剖検 (率)	2 (16.6%)

6 リーダーレポート

准教授 園木 孝志

今年は細井裕樹先生、蒸野寿紀先生、村田祥吾先生が入局してくれた。彼らは和歌山県だけではなく日本の血液疾患の診療・研究・教育の充実に頼もしい存在で、宝である。彼らの期待に答えるべく私も成長していこうと思っている。年の初めには小島研介先生、9月には秘書の大橋典子さん、さらには12月には松岡広先生と東恵美さんが退職された。皆様にはそれぞれお世話になった。有難うございます。いつものように今年の診療、研究、教育をふりかえってみる。

(診療)

畑中一生先生が当科に参加していただいて以降、同種造血幹細胞移植件数が増加している。これはとても素晴らしいことで、血液疾患に苦しむ患者さんが移植のために他施設へ転院しなければならない状態から脱却しつつあるということを示している。一口に移植といってもドナーコーディネートから移植・移植後管理と医療者にかかる業務は膨大であり、チーム医療が必須である。よいチーム医療には患者さんに関わるすべての人たちが高いモチベーションをもって、皆が支えあいながら診療にあたる職場の雰囲気を作っていくことが重要だと思っている。

(研究)

私は4年前にmicroRNAがある急性リンパ性白血病患者さんの免疫グロブリン重鎖遺伝子内に遺伝子挿入されていることに気づいた。約2年前からこの遺伝子異常を模した遺伝子改変マウスを作成して解析をすすめてきたが、自らが見つけた遺伝子異常がおこす形質異常をこの眼で確認できる日が近いと楽しみにしている。この研究には本学や大阪癌研究会からの研究助成を受けており、何とかよい仕事にまとめて恩返しをしたい。また、サイクリンD3発現異常を伴う骨髄原発リンパ腫の患者さんたちをまとめた報告がようやく日の目をみることになった。この仕事も息の長い仕事であった。患者さんをご紹介いただいた施設の先生方に深謝申し上げたい。はたして私がまとめた患者さんたちが真に新しい疾患を代表しているのか、私たちの報告が今後のたたき台になるのではないかと考えている。

(教育)

私が医学部を卒業する際に、ある教授が臨床医の徳とは「新しい疾患概念を確立すること」「新しい診断法を確立すること」「新しい治療法を確立すること」の三つであると話してくれた。医師になってから、入局した教室の教授が大切にしていることは「患者さんから研究へ」ということだと、それとなく学んだ。以来、ことあるたびにそれらの言葉を思い出してきている。私の医療の知識や技量は時代遅れになっていくが、私が先輩方から教わったことは普遍的なことだろうから後輩たちにも伝えていきたいと思う。そこで、血液内科にローテイトしてきた学生や研修医の皆さんには知識や技量ではなく、患者さんに真摯に対応して記録することや内科診断の過程を学んでほしいと思っている。もっとも私は自分が不完全な人間であることを重々承知しているので、若い先生方には「自分のことは棚にあげて」接することにはしている。さて、今年初期研修の場として、血液内科を選択してくれた研修医の今村沙梨先生、千葉堯弘先生、江尻加奈子先生、形部裕昭先生、合田杏祐先生、田中由美先生、田端宏堯先生、津村亜矢子先生、西岡美喜子先生、吉田朱里先生、有難う。皆さんの将来には血液内科での経験が生かされていくでしょう。血液内科に興味がある学生さん、先生方はいつでも大歓迎なので、どうぞおいで下さい。

御礼

准教授 医局長 松岡 広

このたび、平成 21 年 12 月より、母校である神戸大学大学院医学研究科 腫瘍・血液内科へ赴任することとなった。大学人にとって母校から招聘を受けることは大変名誉なことと感じている。これまで以上に研鑽を積んで行きたい。

医師になってはじめての 10 年は臨床に研究に寝る間もないほど忙しく、目の前に大きな壁が立ちはだかっているような感覚を持っていた。しかし、単に多忙であることが悩みの理由だったのではない。努力は惜しまない性質であるので、診療でも研究でも、小さいがそれなりの成果が出て、ありがたい評価もいただいた。しかし、振り返ると、私は自分が真にふさわしい場にあるとの思いを持てずにいたように感じている。

米国から帰国し、和歌山医大血液内科に赴任して 4 年。診療に、病棟運営に、医局運営に、努力を続けた。そして、次第にわかってきたことがある。それは、教育に関してである。大学であるので学生・研修医の教育が業務の一つとなる。多くの大学臨床医にとって教育は大きな負担である。それに見合ったインセンティブもない。そのため誤解を恐れずに書けば、実際それを好まない先生も多い。しかし、私は通常の大学人とやや異なっているのか、私にとって教育はまさにライフワークに近いものであった。大学に採用していただき、心から良かったと感じている。中熊教授はじめ、私を大学へ招いてくださった諸先輩方に深く御礼申し上げたい。

昨年の総括でも触れたが、本年 4 月より、村田祥吾先生、細井裕樹先生、蒸野寿紀先生の 3 先生が入局された。これは、中熊教授以下一丸となって、歯を食いしばって診療と教育に時間と熱意を傾けてきた、チームの成果であると考えている。ご協力いただいた関係各位に感謝申し上げたい。三人の先生はすでに有能な内科医、血液内科医として成長しつつある。近い将来、彼ら自身の輝く姿にあこがれて、次世代の入局者が集まる、そんな日がきっと来るだろうと私たちは期待している。

更に 5 月よりは畑中一生先生が本学へ赴任された。先生はりんくう総合医療センターで移植を立ち上げ、全国でも有数の移植施設に育てた日本有数の移植医の一人である。すでに本学の血液診療・造血細胞移植診療の重要な柱となっている。大学という大きな場所でさらなる成果を上げられることと思う。今後のご活躍をお祈りしたい。以上 4 人の先生方が参加され、当科は元気になって

きている。中熊先生のご慧眼に感謝申し上げたい。

これまで4年あまり、様々な方にお世話になった。この場を借りて感謝申し上げます。中熊教授には医師としてのみならず、人間としてたくさんの薫陶を頂戴した。縁あって、先生に採用していただき、本当に良かったと感じている。米国から帰国して、初めての土地で久しぶりの臨床を行わねばならなかったとき、隣に座っている園木准教授に種々助けていただいた。また、私が体調を崩した時も助けていただいた。大学院生のお二人、栗本美和先生、島貫栄弥先生と過ごした時間は楽しかった。今後の研究の発展が楽しみだ。秘書の大橋典子さん、東恵美さん、花井宏美さんにはいつも暖かくサポートしてもらった。松浪美佐子輸血部主任、岡本恭子元 5 西病棟看護師長、上田恵子薬剤師、血液検査室中村技師はじめ多くの方々に大変お世話になった。これまで、本当にありがとうございました。

神戸では、楽しく効果性の高い医療チーム作りに努力していきたいと考えている。

これまでもまして、関係各位の皆様方のご支援を頂戴できましたら幸いです。ありがとうございました。

お世話になります

病棟医長・助教 畑中 一生

私は5月1日から、縁があつて当大学病院に勤務することとなりました。大学の教官などとは、学生時代にも医師となってからも、全く考えもしなかった仕事です。中学・高校時代の6年間、世話好きで保健委員をしていましたが、保健の先生の「あなたは向いているから、医者になりなさい」という一言に背中を押され、医師を志すことになりました。当時からの理想とする医師のイメージは、保健室と同様にベッドサイドで患者さんと関わっている場面でした。基礎実験で新しい疾患や治療を発見するような偉大な研究者やブラックジャックのような優れた外科医としてのイメージは湧きませんでした。

平成6年に札幌医大を卒業し、大阪大学第2内科に入局した際にも、当時の教授には「基礎実験をするつもりはありません。臨床で頑張りたい」と早々に宣言しました。研修医となってから、そのイメージに最も近い診療科が血液内科であると感じました。

医師となって16年目が過ぎようとしています、基本的に私の仕事のスタイルは研修医時代から変わっていません。(体型は随分変わりましたが・・・)自分の好きな臨床の仕事を常に楽しんでいます。仕事に行きたくないと思ったことは一度もありません。病棟には日々のドラマがあります。血液病棟での闘病は患者さんも医療スタッフも正に真剣勝負であり過酷です。その分、悲しいこともあります。克服できた喜びや満足感も大きいのです。患者さんには疾患以外にも様々な社会的な背景があり、一緒に悩み、長期の間、共に闘病に関わることが出来るのは、非常に重みと魅力を感じる仕事であると思います。

一方で、現在の和歌山県や大阪南部の医療事情、特に血液内科では、危機的な医師不足が進行しています。前職場である、りんくう総合医療センター市立泉佐野病院では、内科系の医師が3分の1以下に減り、かつての多くの専門医療を提供した総合病院としての役割を果たせなくなっていました。大阪では、北部から中心部に医師が偏在しており、和歌山県では、専門医の診療科間での偏在があります。いずれにしても、和歌山県南部で発症した白血病患者さんでも、治療を受けるために遠く大阪市内まで行かなければならない状況もあります。白血病などの根治的な治療法である同種造血幹細胞移植も、高度な専門性とチーム医療の総合力を要しますが、常に10人以上が待機リストに載っている状況です。医師のやせ我慢で成り立っている医療から、安定した地域医療

を再生するためにも、自分の特徴を最大限に活かした仕事を精一杯行ないたい
と思っております。元々、出来の良い人間ではありませんので、ご迷惑もお掛
けしますが、よろしくお願ひ申し上げます。

7 主な来訪者（セミナー講師など）

松井 利充 神戸大学大学院血液内科学分野准教授
(大学院生対象特別講義、6月10日)

8 寄稿文

当院における現況

独立行政法人労働者健康福祉機構

和歌山ろうさい病院 血液内科 阪口 臨

当院当科の2009年を振り返ってみます。

まず、1月に、新築病院への移転が行われました。これを契機に、当血液内科の病床数は、旧病院時代の13床（個室1床、相室6床×2）から、15床に増えました。その内容は、無菌室（準クリーンルーム）2床、個室1床、相室4床×3、となりました。新病院全体では、旧病院の病床数から減少したにもかかわらず、当科は、昨年までの実績を考慮くださり、増床となりました。これは、ひとえに、中熊教授先生のお力添えや、貴医局の皆様との連携などの賜物であります。ここに御礼申し上げます。

次に、新病院開院時より、外来化学療法室が設置されました。がん化学療法委員会の長を務めている関係で、この外来化学療法室のまとめ役も仰せつかっております。ベッド数は定床5床ですが、隣接する別室も活用して、なんとか、患者さんの増加に対応している状態です。

また、新病院へ移転後より、ICT（Infection Control Team）の長も担当しています。各病棟などへの回診や感染予防の啓蒙、さらに、抗生物質の適正使用のチェックなどを、コメディカルのスタッフとともに行っています。特に、冬場は大変忙しく、その対応に追われています。

さらに、同4月より、緩和ケアチームにも、副委員長として参加しています。ここでも、各病棟などへの回診や麻薬の適正使用の調査などを、精力的に行っています。

当院は、コンパクトな規模（病床数 303 床）であることも手伝って、各診療科の横断的な連携は、非常にスムーズになっています。このことが、現在の当血液内科が成り立っている最大の要因かもしれません。

これからも、何卒よろしく願いいたします。

留学便り

花岡伸佳

米国ワシントン州シアトル市 Fred Hutchison Cancer Research Center

(Dr.Thomas Spies の下で研究活動のため留学中)

米国から早くも2回目の報告です。昨年に引き続きシアトル市のフレッドハッチンソン癌研究所臨床研究部門の Thomas Spies 博士の下で研究生活を続けております。この一年間もいろいろな発見や経験がありました。

まず 研究成果について、その一部を紹介します。細胞に癌化や感染などの障害が生じたときに発せられる異常信号として知られる NKG2D リガンドは、通常リンパ球によって瞬時に捕捉され発信元の異常細胞ごと排除されます。しかし、何らかの原因でこのリガンドが排除されずに慢性化した場合、NKG2D リガンドによるリンパ球刺激が続く結果、リンパ球の T 細胞受容体 (TCR) 機能に変化が生じることを見いだしました。リンパ球は TCR を介して 行動の大部分が決定されるため、この TCR 異常に伴うリンパ球のコントロール不全は、癌のエスケープ現象や自己免疫疾患の過敏反応、或は二次性免疫不全を導く一要因になり得ます。この TCR 異常が生じる分子機序の一部を証明することにも成功しましたので、今後治療への応用も期待できる成果と考えています。

この研究の合間、特に週末や連休を利用して、今年はシアトル周辺のリサーチも行いました。シアトル周辺には大自然が広がっており、車で行ける距離に国立公園が多数あります。世界遺産にも指定されている針葉樹の熱帯雨林と氷河を抱く山並みが混在するオリンピック国立公園、標高 4392m で日系人に”タコマ富士”と親しまれるマウントレーニエ国立公園、カスケード山脈から砂漠、海まで様々な景色を楽しめるノースカスケード国立公園です。また、カナダとの国境までも 180km 程度なので、シアトルに近いブリティッシュコロンビア州のバンクーバー、リッチモンド、ヴィクトリアへもドライブ圏内です。これを前号にも紹介しましたように、シアトルは秋から春までの約9ヶ月間ほぼ毎日雨ですから、穏やかな晴れの日が続く短い夏に集中的に訪れました。本当に何処も別世界です。広大な土地に雄大な自然が目前に広がっており、その存在感に圧倒されます。しかし、訪れた人が同じ感動を味わえるように、敷設道路や巡回ルートや展望台の位置に見せたい部分をより良く見せる一工夫あるところがエンターテイメントの国ならではのようです。繊細ながら大胆に振る舞うアメリカ人の 原点を見るようでした。カナダの都市は、来年の冬季オリンピック開催も迫りどこも工事が盛んでしたが、歴史的建造物と近代的建物がうまく調和しバランスの取れた美しさが印象的でした。さらにバンクーバーの日本料理

とリッチモンドの中華料理には徐々に癒されました。このように、毎週が海外旅行気分、ちょっとした未知との遭遇という冒険感覚も存分に味わえた今年の夏でした。

このような非日常生活も約半年で終わります。たくさんの友人も出来ました。ここでしか出来ない経験もたくさん出来ました。充実した日々でした。今は少し日常に戻るのが怖い気もしますが、まずは残された日々を大事にして、最後まできちんと責務を全うすることを第一にと考えています。そして、この経験を今後の人生に活かして行ければと思います。この留学の機会を与えて下さった中熊教授ならびに医局の皆様、そして留学を支えてくれた家族に感謝致します。